

## 心敬と自然美：彼の反仏教的発想への理解の試み

井手，恒雄  
福岡女子大教授

<https://doi.org/10.15017/12358>

---

出版情報：語文研究. 6/7, pp.66-73, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 心敬と自然美

—彼の反仏教的発想への理解の試み—

井 手 恒 雄

矣

たとえば赤人と自然だとか、西行と自然だとか、古文芸の或る作家によつて描かれた自然美を論ずることは、今日では人に陳腐な感じをさえ与えるように思われる。にもかかわらずわたしが、ここで「心敬と自然美」という題をかかげて、彼の作品で取り扱われた自然美を問題にするのは、副題にも示すように、それを通じて彼の、遁世詩人としては案外と考えられそうな、反仏教的発想とでもいふべきものを、明らかにしてみたいからである。実際彼は普通に、最も仏教的な作家であるとさえ考えられている。その彼の作品の反仏教的な本質をわたしは見届けたいのである。反仏教的発想、というようになことにについては、大いに説明を要するところであるが、それはこの小論の全体を通じて明らかにすることにした。

本稿は旧稿「心敬（その作品の非仏教的性格について）」（福岡

女子大学発行「文芸と思想」第一号）の補説として、特に彼の自然美に対する態度に焦点を置いて、書いたものである。

×

×

×

何よりも、彼の作品について具体的に見て行きたい。

二度は人とならじと思ふ身に

ただ月にめで花に暮らさん

（『竹林抄』）

（以下に引用するものもみな『竹林抄』に見られるものである。）これは「二度とは人間に生まれて来るとは思われなわが身なのだから」という句に、「ただ月をめで花を眺めて暮らそう。」と附けたのである。ちよつと考えると、心敬は「自分は遁世者の身として、俗世のわずらわしさからのがれ、月花の風流三昧に日を暮らそう。」といっているものようである。そしてそれは普通に心敬とか宗祇とかいう人たちが、「いわゆる僧侶と呼ぶべきものではなく、むしろ僧衣を纏った芸術家と呼ぶべきもので、今の言葉で

いう知識人、インテリゲンチヤは、この頃多くは出家して僧衣を纏うことによつて、自分の芸術家としての自由な生活を楽しんだものである。」などといわれる「通説」を、裏づけるものようである。が、果たしてそうであるか。

わたしは、心敬のこの作品は、次のような他の人の作と対比して考えてみる必要があると思う。

捨つる身は木深き蔭に庵しめて

専順

うき世の月よ見えじ眺めじ  
この専順の作は「うき世を捨てたわが身は木深い山かげに庵をさだめて」という句に附けて、「うき世の月よ。わたしはもうお前から見られまい。わたしもお前を眺めまい。」といったものである。この専順の作と対比して心敬のそれは、どのような意味を持つものであろうか。専順は山里に遁世して「うき世の月」を眺めまい、そういうものから身をかくそう、という。それに対して心敬は同じ遁世者として、ただ月をめて花を眺めて暮らそう、という。その相違はただ性格とか趣味とかだけにかかるものであるか。

専順の句の中で、問題にされなければならないのは、「うき世の月」であろう。「うき世の月」とは何か。まず以て「うき世の月」は、「うき世の」「月」であり、たし

かに「うき世の」と限定された「月」である。この場合「うき世の」という語は、ただ何となく無意味に添えられたものではないにちがいない。ただ何となく無意味に添えられたもののように考えるのでは、もともと一語々々が生々々々、決して他の語では代用されない微妙な言葉の配列から成る、連歌芸術のすぐれた作品を正しく味わうことになるまい。ではなぜ専順において「月」が「うき世の」と限定されたのであろうか。思うにそれは、専順において「月」がまさに「うき世の」と限定されるにふさわしいものであったからである。それはまた何を意味するかというに、専順の遁世者としての自覚として、もともと「月」は「うき世の」ものであり、月をめであるというようなことは俗人の仕わざであると考えられたからのことである。そう見てこそ、山里に隠れて月から見られまい、自分も見まいという、彼の遁世者らしい決意に満ちた境地が、うかがわれるというものであろう。

さて、そういう専順の作に対して、心敬のそれはどうであらうか。それを仮りに前記の通り、「俗世のわずらわしさからのがれて月花の風流三昧に日を暮らそう。」というようなものだとしよう。そうすると、心敬において月(及び花)は、専順の場合考えられたように世俗的なものではなく、逆に遁世者にのみその享受を許容された、脱俗的

なものとなる。同じ月が、一人の遁世者においては厭うべき世俗のものであり、他の一人においては愛すべき脱俗の友である、ということが許されるであろうか。普通にはそれが許されている。心敬の句を専順のそれと対比するといふ、わたしの望む手続きを経た上ではないが、世を遁れて風流三昧に遊ぶというようなことが、中世遁世詩人（それは国文学者の間ではいわゆる「隠者」として特別扱ひされるのが常である）の中世遁世詩人たる所以の「自由」であると考えられている。中世遁世詩人の「自由」とは、果たしてそのようなものであろうか。

ここで私見をのべると、同じ月が、一人の遁世者においては厭うべき世俗のものであり、他の一人においては愛すべき脱俗の友である、というようなことは許されない。というより、心敬というような人において、月が愛すべき脱俗の友であったと考えるのは、今日における常識の誤謬というものである。ちよつと考えるとそう思われそうなることであるが、それは古人の心理を現代人のそれで類推することから生じた、大きな誤りである。思うに、心敬その人においても、月は厭うべき世俗のものであったが、彼はその世俗のものを捨てるにしのびず、むしろそれをめでて暮らしたいというのである。

われわれは今日、「二度は人にならじ」という表現の意

味を、辛うじて理解し得ている。辛うじて、というのは、二度と人間に生まれては来まいというような感覚は、古人のものであつて、決して現代人たるわれわれのものではないからである。昔の人は輪廻転生ということを信じていたと知つて、はじめて古人の句も理解できるというものである。同じように、「ただ月にめで花に暮らさん」についても、現代人とは全然異なる古人の物考え方感じ方のあることを、知らねばなるまい。古人は、遁世者が自由の身になつて月花をめでるといふようなことを、信じなかつたにちがいない。彼らはせいぜい、世俗のわずらわしさから解放されて自由であるべき遁世者が、まだ月花の美に執をとどめていることよ、という感じ方をしたものと思われる。

ここで、心敬に先立つて同じ「隠者」の糸譜につらねられる兼好その人が、「なにがしとかやいひし世捨人の『この世のほだしもたらぬ身にただ空の名残のみぞ惜しき。』といひしこそ、まことにさも覚えぬべけれ。」（何某とかいつた遁世者が、「自分はうき世の執着はすべて断ち去つたつもりなのに、ただ四季の風物の魅力だけは捨てかねている。」といったのこそ、いかにもそうあらうと、わたしも思う。）といつてゐることを、考え合わせるべきところであると思う。

心敬の作品には、たしかに「自由」の名で呼ばれるに足るものがある。その「自由」は、彼の芸術を価値あるもの

たらしめている。しかしわれわれは彼の「自由」がほんとうのところどういうものであり、何に對するものであるかを知らねばならないと思う。

つづけて私見をのべると、心敬の「ただ月にめで花に暮らさん」は、当時の仏教の禁欲主義に對して自然愛好の「自由」をうたったものとして、そういう禁欲主義に對するアンティ・テーゼとして、重要な意味を持つのである。それは專順の作と比べてどうかというに、より「自由」な気持をうたったものであり、そこにこの心敬の作の注意すべきものもあるのである。

わたしは心敬の「ただ月をめで花に暮らさん」は、次のような作品とも対比してみるがよいと考える――

なほたづね入る奥の山寺

しきみつむ峯には春の花もなし

智 蕪

これは、「人里を一層離れた奥山寺をたずねていく。」という句に、「仏前に供える櫛をつむ峯には村里のように咲き匂う桜とてもない。」と附けたものである。櫛というものは、最も地味なものである。それはわれわれ現代人も仏前のもとして印象づけられているものであるが、遁世者が日夜礼拝する仏前には、それさえあればよかつたのである。「花」（桜）は「月」がそうであつたように、いわば世俗のものとして、そういう場所にはふさわしくな

い。奥山の峯には櫛があるだけで「春の花」もないというのは、少くとも表面的には決然たる遁世者の自覚を詠んでいるのである。少くとも表面的には、というのは、しばしば「もう自分は月花の美には心を奪われまい」という言い方で、逆説的に禁ぜられたものへのあこがれが表現されるからである。

なせ月や花がそれほどまでに厭われたかというに、そこが中世仏教の禁欲主義なのである。まさかそれほどでもなかつたらうというのは、現代人の心理である。かの西行が、「花に染む心のいかで残りけん捨て果ててきと思うわが身に」と詠んだことと思ひ合わせるべきところである。その荷酷な禁欲主義と対決して、心敬の「自由」精神は「月にめで花に暮らさん」の句を生んだ。そこが尊いのである。そう見てこそ心敬の芸術のよき、有難さもわかるというものである。

心敬の「ただ月にめで花に暮らさん」は、また次のような彼自身の作品と対比して考えるがよいと思う。

世のうきふしに桜ちる山

身こそあれ思ひ捨てべき春もなし

これは「うき世を厭い捨てようとする折ふし山里には桜が美しく散る」という句に、「わが身を捨てることはできても春にそむくことはできない。」とつけたものである。

遁世者にとって花に彩られる春は、もともと厭離すべきものであるのに、心敬は、それが捨てられそうにもないと思ふのである。この歎きは、彼が「月にめで花に暮らさん」の境地に到達するまでに経験しなければならなかった苦惱である。遁世者として、散る花に心をうばわれることは咎められなければならないことであつたればこそ、この歎きも生まれたのである。

遁世者らしからぬ官能の動きを自ら咎めながら、心敬がついに「月にめで花に暮らさん」の境地にたどりついたといふことは、注意すべきことである。それは彼の「月にめで花に暮らさん」が、ちよつと考えられるように呑気なものではないことを教えるだけでなく、彼の他のすぐれた作のすべてが、当時の仏教思想と切実に対決してつづつ作られて行つた事実を示唆するものであると思われる。

## 二

さて、心敬の自由精神が当時の仏教の禁欲主義と対決することによつて得られたとか、彼の芸術が反仏教的な発想を盛るものであるとかいうことに對しては、異論があることと思われる。それは、仏教の禁欲主義と対決するとか、反仏教的発想とかいつても、心敬の立場は、それはそれな

りに一つの仏教的なものではないか、というのである。実は、この不審な反論に答えるのが、本稿の重要な目的であるといつてもよい。わたしとしては、心敬の作品の妙味を知る前提として、月花の風流を妄執として斥けた当時の仏教の禁欲主義の実態が認識されればそれでよいようなものであるが、しかしそのためにも心敬の立場を一種の宗教的立場だとすることに、やはり反対しないではいられないのである。今日、「我々の祖先の精神生活の内に自然が、殆ど宗教に於けるそれに等しい一種の救済者としての働きをなして来た事実」を以て「独特の、恐らくは最も日本的と呼ぶことを許されるであらう心境」であると考へることがあり、多数の支持を受けているようである。それに従えば、世を遁れて風流三昧に目を暮らす（実は心敬の境地はいわゆる「風流三昧」ではないのであるが）というのが、一種の宗教的態度だといえないことはない。しかもわたしが、そういう考へ方に反対しないではいられないといふのは、それははかならぬ心敬の作品の独特の持ち味を、結局のところ生かして味わうことができないと思われるからである。一つの宗教論として、月花を愛することが宗教に通じると考へてはなせいけないか、というようなことを議論し出すと、きりが無い。わたしは、「独特の、恐らくは最も日的と呼ぶことを許されるであらう心境」というようなこと

に、はじめから疑問を持つ。そう考えること自体が、「独特」とか「日本的」とかいわれないにしても、われわれ日本人の特に陥りやすい誤りではないかと思う。とはいってもこのこの議論は、「そう考えても別に悪いことはないではないか」というようなことになるのが、落ちである。そこに行く、具体的な作品の解釈乃至鑑賞の問題となると、そういう曖昧なことではすまされなくなる。わたしは、古文芸研究というものの意義がそういうところにあるのではないかと考える。

ここでさらに、不用意によめば心敬においては自然美を愛することがそのまま宗教に通じていたと考えられそうな例を添えて、私見をつづけたい。

春の夜残るしののめの月

心さへほのめく花のかげにねて

野辺も緑の春を知るところ

ひばり啼くあしたに草の戸をあけて

この二つの連歌のうち、前者は「春の夜は明け方近くなつたがしののめの月が名残りをとどめている。」という句に「自分は今を盛りと咲き匂う桜の下に野宿して心も浮き浮きする」とつけたものである。後者は、「野辺も春の気配をさとして緑の衣裳をまとうところである。」というのに「ひばりの啼く朝草庵の扉をあけて一步外に出ると」とつ

けたものである。

いずれも切実に自然美への愛着の心をよんだもので、「ただ月にめで花に暮らさん」の気持を、さらに具体化したものとなっている。ここで心敬は、もうどうすることもできない気持で、自然に見入っている。こういう境地を、なぜ一種の宗教的なものとししないで、逆に反仏教的なものとなればならぬのであろうか。わたしが思うに、心敬の「心さへほのめく花のかげにねて」「ひばり啼くあしたに草の戸をあけて」などの境地が、宗教的なものであるというからには、それは一つの安定したもの、安住するに足るものであるはずである。それが遁世者のものとして悟道の深さを示すものではあつても、決して僧侶らしからぬものとして非難されたり、自ら恥じられたりすべきものであるはずはない。ところで実際はどうであるか。一体これらの境地は、花と月との風情を満喫し春の夜明けの快感に心を躍らせる人の気持がみごとにうたわれているというようなものであるか。何ものにもわずらわされない遁世者の心境であるというものであろうか。そうではないとわたしは思う。これらは、いわゆる自然美が「遁世した自分ではあるのに」という気持で眺められ、そしてそれゆえに切実に捉えられたものでなければならぬと思う。それは「いかにも遁世者らしい」といわれるものでなくて、逆に「遁世

者らしくない」といわれるべき性質のものであると思う。

前述のように、「身こそあれ思ひ捨つべき春もなし」と、遁世者らしからぬ官能の動きを振り捨て得ぬことを歎き、やがて「月にめで花に暮らさん」の境地に到達し得た心敬が、さらに次ぎ次ぎとこのような美しい憧憬の世界を詠んで行ったのである。その、仏教の禁欲主義と対決しつやがてそれから抜け出て行った過程など、いわゆる「宗教的自然観」では把握できないであろうと思うのである。

一つの譬喩を用いて言うなら、これは今日一人の僧侶が魚釣りを好んで、仏事の暇を見ては川や海に通うようなものである。魚釣りといえば、「糸を垂れて水面を見つめている気持は宗教に通じる」などとよくいわれるものであるが、この場合はどうであろうか。われわれは、魚釣りがあるが、宗教に通じるかどうかを論じる前に、一体そのような所業が僧侶として何を意味するかを問題にすべきであろう。わたしは現代の仏教界の実状を知らないが、多くの僧侶は、酒を飲んでも怪しまれないと同様に、魚釣りをしても不審がられないままで、世の中は開けているのではあるまいか。しかもかりにそうであるとしても、かつて重罪とされた殺生戒が、どのようにして解消されたかにこそわれわれは興味を持つべきであって、そこで「釣魚三昧」などという、便利なるがゆえに曖昧な概念を弄んで、事がらを混乱

させるべきではあるまい。と同様にわれわれの心敬の場合、僧侶らしくない（それは実際今日の僧侶が酒を飲み魚釣りをする以上に僧侶らしくない）彼の所業がどのようにして彼のすぐれた「詩」を生んだかをこそ探るべきであって、それを「風流三昧」（乃至「宗教的自然観」）論で無意味に混乱さすべきではあるまい。事実彼の作品は、その調べの中に今日の僧侶が平気で魚釣りをすると異なる、不安のおのきがあるではないか。

心敬の作品における反仏教的発想というものをあらかじめ理解して置かないと、その真意が容易に把握され得ない（ほんとうはその作品を厳密に味わえばそれは可能はずであり、われわれの文芸論はそのように作品から出発すべきものであるが）作品というものはあるようである。というのは、一体連歌というものは格別「てにをは」の妙味を重んじるものであるが、最後にかかげた作品の、「野辺も緑の春を知るところ」の「も」など、その意味するところは微妙である。それはどういう意味の「も」なのであるか。その「も」一つによつて、この句と心敬の附句とはどのように生かされるであろうか。思うにそれは、「無心の野辺も春を知る時節である」という意味の「も」なのである。全体は「非情の野辺も春を知る時節である。自分も遁世者ながら魂を奪われずにはいられない。」というのであ

る。ちよつと考えるところは、「ひばりの声ばかりでなく、緑に萌え出る野辺にも、春の気配が感ぜられる。」といっているもののようである。あるいはまた「自然を友とする自分だけが春の訪れに浮きうきするばかりでなく、野辺も春の来たことを知って緑に身を飾ってよろこんでいる。」といっているようでもある。しかしそういう解釈は、心敬の眞の詩情を知るものではない。そういうものであれば、心敬という人が尊敬され、文芸史に名を残すことはなかつたかもしれない。そのような解釈がなぜ信ぜられがちであるかというに、それは心敬というような人は遁世して風流三昧に暮らした（甚だしい場合には風流三昧に暮らしたいために遁世した）と頭から信じて、彼の発想が反仏教的なものである（うなどは、考えもしないからのことである）。

心敬の反仏教的発想といえば、奇異な感じさえ人に抱かせるかもしれないが、彼の、仏教の禁欲主義に堪えられなかつた気持、結局はその逆のものであつた詩情の本質、というものを知らない、こういう場合「も」という一つの言葉の意味さえ、正しくは理解されないのである。

（一九五七、七、二）

註 『宗教的自然観の展開』（家永三郎）